

# 戸出古戸出遺跡調査概報

平成11年度 県営土地改良総合整備事業（高岡地区是戸28号線）  
にかかる農道拡幅改良工事に伴う発掘調査

2000年3月

高岡市教育委員会



整穴住居址 S I 1 出土  
赤彩鉄鉢形土師器

高岡市埋蔵文化財調査概報第46冊  
戸山古戸出遺跡調査概報

目 次

序  
例言  
調査参加者名簿

第1章 序 説

遺跡概観	1
調査に至る経緯	2
調査経過	2
調査区の設定	2

第2章 遺 構

整穴住居址	2
掘立柱建物址	4
柵址	5
その他の遺構	5

第3章 遺 物

土器	7
その他	8

第4章 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定について	9
放射性炭素年代測定結果報告書	10

第5章 結 語

器種構成について	17
検出遺構について	18
まとめ	18

## 挿 図

第1図 戸出古戸出遺跡周辺図	1
第2図 嚻穴住居址 (SI1) 出土状況図	3
第3図 整穴住居址 (SI1) 平面図及び断面図	3
第4図 桁立柱建物址組立図	6
第5図 筒形土製品 (陶邑・伏尾遺跡出土品)	岡面5

## 表

第1表 戸山古戸出遺跡関係年表	9
第2表 戸出古戸出遺跡の器種構成	17

## 遺構写真

図版1	航空写真 (米軍撮影)
図版2～3	調査区風景
図版4～7	傭穴住居址 (SI1)
図版8	航空写真

## 遺物写真

図版9～10	杯蓋・杯身・皿
図版11～12	長胴甕
図版12	壺・甕・鍋・壺・瓶・土鍼・錢貨・筒形土製品

## 遺物実測図

図面1	杯蓋	(1/3)
図面2	杯・皿・鉄鉢	(1/3)
図面3	長胴甕	(1/4)
図面4	壺・鍋 (1/4)、甕 (1/3)	
図面5	その他 (1/3)、筒形土製品 (1/8)	

## 調査参加者名簿 (五十音順 敬称略)

### 現地調査

麻生 正三	不崎きめ子	石崎 孝和	井山 尚之	織田幸太郎	沢山 宜亮
柴田 優	隅田 則明	田所 人志	塙原 望	中田 俊男	中山 清二
早瀬 清二	前田 節子	増山真由美	吉田かな子	古田 伸	吉田 升
Frauke Schnerch					

### 室内整理調査

江村 昌子	片岡千賀子	北島 力永	柴田 優	田所 人志	田中美穂子
塙原 望	上合 祥司	伏江 詩子	増山真由美	村田 理恵	

## 序

高岡市戸出地区は、庄川流域に形成された砺波平野に位置しており、背後に聳える山々から流れ出る雪どけ水と肥沃な土壌により、北陸地方有数の穀倉地帯として発展し、「散居村」という独特の農村景観を現在に留めております。

当地においては、これまで本格的な発掘調査が実施されていませんでした。この度、県営土地改良総合整備事業（高岡地区是戸28号線）にかかる農道拡幅改良工事に先立つ調査により、庄川扇状地の扇端部における地域史を検討しうる資料が発見されました。

本調査においては、奈良時代中頃から平安時代初頭にかけての堅穴住居址及び掘立柱建物址などが確認され、遺物としては住居址より「鉄鉢形土師器」などが出土しました。これは、本来、托鉢に使用した金属仏器を模倣したものですが、「ベンガラ」を用い赤く彩色を施したものであります。このような品物は、近隣の東大寺領莊園などに労働力を提供した折りに入手したものと考えられます。また、調査結果により現代まで連綿と続く農村景観の形成過程を復原する上で端緒となる貴重な成果を得ることができました。

最後になりましたが、調査成果が多くの人々に活用され、地域の歴史及び文化理解の礎となれば幸いです。また、調査実施にあたりまして多大なご協力をいただきました方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

## 例　言

- 本書は、富山県高岡市における、埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 本書は、県営土地改良総合整備事業（高岡地区足ノ28号線）に係る農道拡幅改良工事に先立ち実施した、発掘調査結果である。
- 当調査は、富山県高岡農地林務事務所の委託を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
- 調査地区は、富山県高岡市戸出5丁目・戸出光明寺地内に所在する。
- 現地調査は、平成11年8月2日から同年12月13日までである。
- 調査関係者は次のとおりである。

文化財課長：宮村 勝博

課長補佐：大石 茂

〔埋蔵文化財担当〕

主幹：石浦 正雄

課員：山口 長一　根津 明義　荒井 降　太田 浩司

- 現地調査及び整理・報告書作成業は太田が担当し、根津が一部補佐した。
- 現地調査及び報告書作成においては、以下の各氏から指導・協力を得た。（五十音順、敬称略）  
池野 正男 川崎 晃 久々 忠義 新谷 秀夫 鈴木 景二 利波 匠裕  
林 大智 藤井 一二 宮田 進一 森 隆
- 本書の執筆は、太田が担当した。
- 測量・図化業務については、御エイティックに委託した。
- レントゲン撮影は、富山県工業技術センターに委託した。
- 放射性炭素年代測定業務は、㈱中部日本鉱業研究所に委託し、測定業務は核燃料サイクル開発機構 東濃地科学センターが実施した。また、年代校正については㈱中部日本鉱業研究所が実施した。
- 本書における方位は、遺構図に関しては座標化にあわせた。
- 遺跡略号の表記については、「TF 1」を設定し、実際には出土遺物単位毎につけた遺物番号（R番号）を略号の後に付加して用いた。（例えば、TF 1 R 1）。
- 土色判定にあたっては、『新版 標準上色帖（1999年版）』にもとづいた。
- 地形図及び米軍撮影航空写真的掲載に関しては、国土地理院の承認を得た。
- 本書における遺構の種別は、下記に示す記号を用いた。

S A —— 標址

S B —— 柱立柱建物址

S D 溝状遺構

S F —— 破壊状遺構

S I —— 呼穴住居

- 本書における遺物番号は、次のとおりである。

101 須恵器

201 土師器

301 金属製品

401 上製品

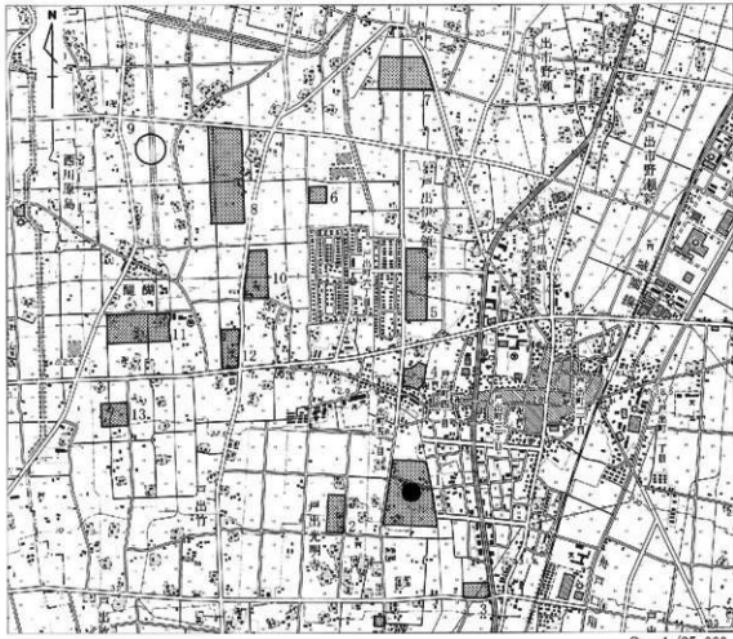


# 第1章 序 説

## 遺跡標識

「戸出古戸出遺跡」は、高岡市南部に位置する戸出地区に所在する。地形的には、庄川扇状地の扇端部に立地し、現況で標高28mから30mを測る。また、近世以降に形成された戸出市街地は当遺跡の北側に広がり、扇端部の下段に位置する。さらには、庄川はかつて氾濫を繰り返し、幾度となく流れを変え、千保川筋や荒又筋などとして扇状地上に島状の微高地が形成され、当遺跡は祖父川筋に形成された。

戸出地区には、古代の遺物を包藏する遺跡が確認されているが、何れも試掘調査の頻度が少なく且つ発掘調査がなされておらず、詳細な内容の解明にはいたっていない。また、金田章裕氏により戸出市野瀬周辺に東大寺領莊園のひとつである「伴名蛭村」を比定する案が提示されているが、発掘調査による物証は得られていない。さらには江戸時代の篤農家「五十嵐篤好」は、自著『郷庄考』のなかで戸出岡御所の地に『和名頃聚抄』にみえる「大岡郷」を比定する考えを提示している。このように、当地における中世以前の歴史は明らかでなく、今回の調査は貴重な資料を導き出したものと考えられる。



第1図 戸出古戸出遺跡周辺図

S - 1 / 25,000

1. 戸出古戸出遺跡
2. 戸出光明寺西遺跡
3. 戸出光明寺東遺跡
4. 戸出4丁目北遺跡
5. 戸出6丁目東遺跡
6. 戸出6丁目北遺跡
7. 戸出伊勢領北遺跡
8. 戸出後生寺遺跡
9. 池屋寺田遺跡
10. 戸出氣比神社遺跡
11. 戸出横越北遺跡
12. 戸出池屋遺跡
13. 戸出横越南遺跡

### 調査に至る経緯

平成9年度に、県営土地改良総合整備事業（高岡地区是1'28号線）にかかる農道拡幅改良工事に先立ち、工事担当の高岡農地林務事務所から高岡市教育委員会文化財課へ発掘にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて照会がなされた。その結果、戸山古戸山遺跡の包蔵地に該当し、事前調査が必要であることが明らかになった。このような経緯から、地元土地改良区も加わって協議した。

平成10年度には、これを受けて同年10月14日より同年10月30日にかけて、高岡市教育委員会において試掘調査を実施した。この調査は、調査対象面積1260m<sup>2</sup>のうち、14箇所の試掘坑を設定し、合計で229m<sup>2</sup>を掘削し、遺跡の所在の確認にあたった。その結果、奈良時代から平安時代を中心とした遺物及び構造が検出された。これらは、調査区の南側を除く地点に広がっており、本調査の必要があるものと判断された。

その後、関係者間での数度にわたる協議の結果、平成11年8月から現地調査を行うに至った。

### 調査経過

現地発掘調査は、平成11年8月2日から同年12月13日まで実施した。調査区においては、試掘調査時に奈良時代や平安時代を中心とする遺物が検出され、当該時期にあたる遺構の存在が確認されていた。

表土の除去はバックフォーで行った。その後、測量業者による基準点などの設定作業を実施した。次いで、手作業により遺構検出を実施した。その後、遺構の掘削、記録などの作業を適宜行った。調査終了時には、ラジオコントロール・ヘリコプターにより図化作業などの写真撮影を実施した。

### 調査区の設定

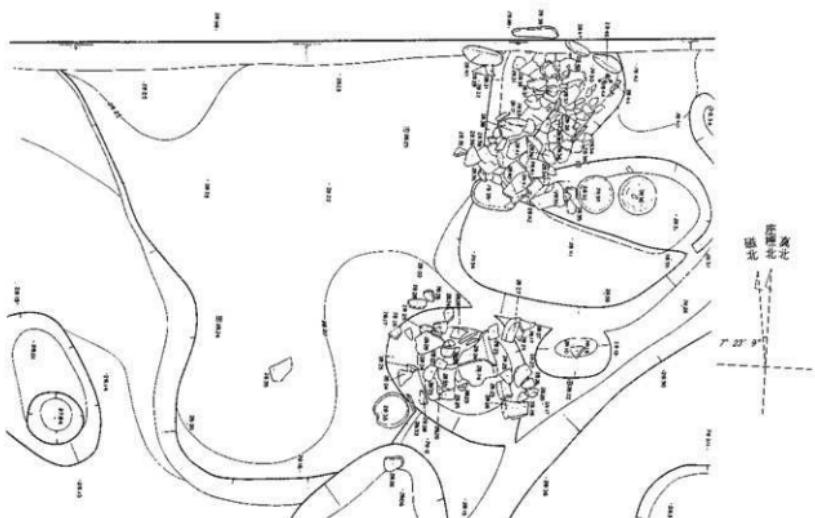
本調査における調査区は、平面直角座標系の第VII象限系（原点は北緯35° 0' 0"、東経137° 10' 0"）に合わせた。南北にX軸、東西にY軸をとり、原点より北へ1km、東へ1kmの位置がX=1、Y=1の地点である。

グリッドは、調査区の形状に合わせた10m区画である。

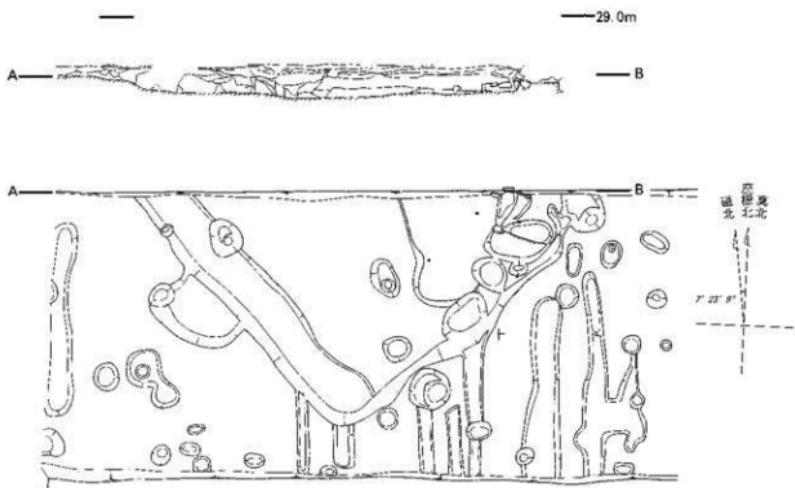
## 第2章 遺構

### 堅穴住居 S11

規模及び形態は、北側半分が調査区外にあるため完全には復元できない。しかし、検出部分をもとにある程度推定が可能である。平面形態は、隅丸方形であり、南西側に入口を設け窓みとして痕跡が残存する。また、隅角に造り付け窓を有する。窓の類型は、二つ掛け横並びである。主柱は、推定4本柱である。平面規模は、5.2m×6.2mをはかり、面積は32.24m<sup>2</sup>と推定される。主軸方向は、N 47° Eをはかる。共伴遺物は、長胴壺6点（図面三、205～210）・杯蓋3点（図面一、101, 102, 104）・杯A1点（図面二、109）・鉢鉢1点（図面二、203）・瓶2点（図面五、214）・筒形土製品1点（図面五、401）・甕1点（図面五、216）などがあり、十層断面図などからも家屋廃絶時点以前に位置づけられる。



第2図 整穴住居S-1-1遺物出土状況図 1/20



第3図 整穴住居S-1-1平面図及び断面図 1/80

## 掘立柱建物址

今回の調査区は、道路敷のみが調査対象であった為、遺物などの復原に関しては限界がある。したがつて、復原案を提示することとめ、今後隣接地の調査が実施された時点で再検討する必要がある。また、方位に関しては磁北にあわせた。

### 掘立柱建物址 S B 1

桁行2間×梁行3間以上の側柱建物である。梁行方向は、N-9°—Wをしめす。掘方の平面形は、推定方形である。共伴遺物なし。

### 掘立柱建物址 S B 2

桁行2間×梁行3間以上の側柱建物である。梁行方向は、N-21.5°—Eをしめす。掘方の平面形は、円形である。柵址S A 1を伴った配置をなし、S B 3と先後関係にあると考えられる。共伴遺物なし。

### 掘立柱建物址 S B 3

桁行2間×梁行2間以上の側柱建物である。梁行方向は、N-9°—Eをしめす。掘方の平面形は、円形である。柵址S A 2を伴った配置をなし、S B 2と先後関係にある。共伴遺物なし。

### 掘立柱建物址 S B 4

桁行3間×梁行3間の純柱建物である。梁行方向は、N-13.5°—Wをしめす。掘方の平面形は、推定方形である。堀立柱建物S B 1・S B 5・S B 6並びに柵址S A 3・S A 4と同時共存したものと考えられる。共伴遺物なし。

### 掘立柱建物址 S B 5

桁行2間×梁行2間の側柱建物である。梁行方向は、N-12.5°—Wをしめす。掘方の平面形は、方形である。柵址S A 3を伴った配置をなす。共伴遺物なし。

### 掘立柱建物址 S B 6

桁行2間以上×梁行2間以上の側柱建物である。梁行方向は、W-9°—Sをしめす。掘方の平面形は、推定方形である。柵址S A 2を挟んでS B 5などと共存する。共伴遺物なし。

### 掘立柱建物址 S B 7

桁行2間×梁行2間以上の側柱建物である。梁行方向は、N-75°—Wをしめす。掘方の平面形は、円形である。堀立柱建物S B 2並びに柵址S A 1と共存したものと考えられる。共伴遺物なし。

## 柵址

今回の調査区は、道路敷のみが調査対象であった為、掘立柱建物址と同様に復原に關しては限界がある。例えば、建物址などに復原される可能性などが十分に考えられるが、ここでは建物址との配備關係などを考慮して検討した。したがって、今後隣接地の調査が実施された時点で再検討する必要がある。

### 柵址 S A 1

主軸方向は、N-78°—Wをしめす。掘方の平面形は、円形である。掘立柱建物址 S B 2 と共に存関係にあると考えられる。共伴遺物なし。

### 柵址 S A 2

主軸方向は、N-88°—Wをしめす。掘方の平面形は、円形である。掘立柱建物址 S B 3 と共に存関係にあると考えられる。共伴遺物なし。

### 柵址 S A 3

主軸方向は、W-5°—Sをしめす。掘方の平面形は、円形である。掘立柱建物址 S B 2 及び掘立柱建物 S B 3 と共に存関係にあると考えられ、両者の間に位置する。共伴遺物なし。

### 柵址 S A 4

主軸方向は、N-5°—Wをしめす。掘方の平面形は、円形である。共存関係は、柵址 S A 3 と並行すると考えられる。共伴遺物なし。

## その他の遺構

### 歯状遺構 S F 1

堅穴住居址 S I 1 と切り合い関係を有し、歯状遺構が新しいことを確認している。数条の溝状遺構から構成されるもので、多くの場合、烟址と理解されることが多いものであるが、共伴遺物が認められないので詳細は不明である。方位は、N-2°—Wをしめす。

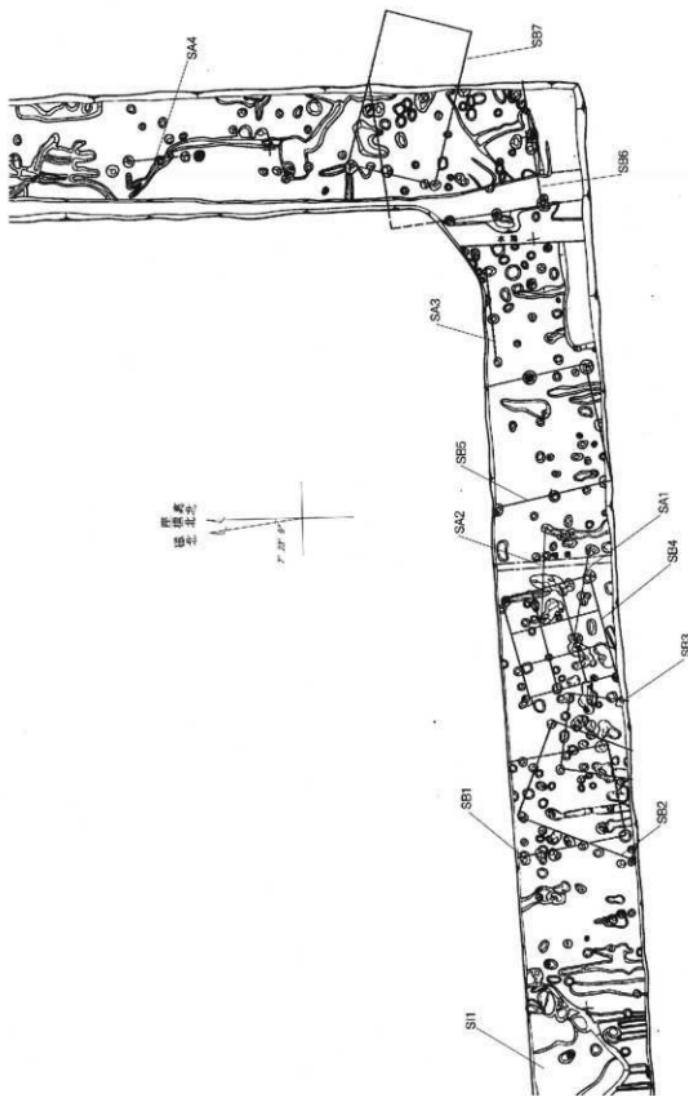


图4 据立柱建物址纵立图 1/200

## 第3章 遺 物

今回の調査では、北側の調査区から大半の遺物が出土した。これらの内訳は、古代から近世まで至るが、古代の物が大半を占める。中世及び近世の物は、表上から出土した。また、遺物は遺構精査時に大半が出土し、遺構に伴ったものは竪穴住居S I 1から検出された上器群が中心である。

### 土器

年代的には、8世紀中頃から10世紀前半頃までの範囲にその殆どが属し、一部は從来の編年では8世紀前半位に位置づけられてきたものもある。

#### 土師器

土師器については、杯A、杯B、皿などといった食膳具と、甕・壺・鉢を中心とする煮炊具とに出土品が二分される。ただし、煮炊具に関しては当遺跡で得られた年代において一様に事例が認められが、食膳具は8世紀には希薄であり、概ね9世紀代以降の個体が顕著に認められた。

##### 杯A (図面二、204)

杯類は、須恵器に比べて割合は少ない。

##### 皿 (図面二、201、202)

前者は、内外面共にロクロナデを施し、底部は糸切りの後高台をつくりあげている。後者は、内面は麻耗が激しく判然としないが、外面調整はロクロナデを施し、底部は回転糸切りである。

##### 長胴甕 (図面三、205～210)

長胴甕は、6個体出土したが全て竪穴住居S I 1内部の甕及びその周辺からのものである。これらは、器高約35cm程度のものとみられ、口径は約23cm程度をはかり、法量は、概ね規格がそろっているとみられる。しかし、形式的には、從来の編年観では先後関係にあるものであり、今後検討する必要があろう。器面調整は、内面調整はハケメを主体とし、口縁部のみナデ成形を施すものが大半である。一方で、外面調整は口縁部がナデ成形が多く、胴上半部は横方向カキメとハケメである。胴下半部については、ケズリとハケメが大半である。

##### 小甕 (図面四、213)

小甕については、調整法が不明であるが、外面には明瞭に火を受けた痕跡が認められる。一方で、内面調整はナデ成形である。なお、長胴甕の破片群直下からの出土である。

##### 瓶 (図面五、211)

2点出土するが、何れも竪穴住居S I 1から出土した。底部のみ検出されるにとどまる。器面調整は、内外面ともにハケメである。

#### 須恵器

須恵器については、杯Aや杯Bといった食膳具と、これに付随するとみられる杯B蓋が全体の中でも多数を占める。また、甕や壺などの貯蔵具がみられる。年代幅としては、概ね8世紀中頃から9世紀初頭を

中心に展開する

杯A (図面二、109、111、112、115、118)

遺物番号109は、土師質であり赤彩痕とみられる部分も若干確認され、赤彩土器の範疇にはいる可能性もある。出土遺構は、整穴住居址S I 1の覆上内部出土である。また、遺物番号115は内面に施記号「×」を施している。

杯B (図面二、110、113、114、116、117)

器種構成比率は、杯A及び杯Bの間で大きな個体数の格差は認められなかった。

杯蓋 (図面一、101~108)

杯蓋は、宝珠形ツマミを有する。遺物番号101では、内外面に重ね焼きの痕跡を明瞭に残し、内面は自然釉により、外面は口縁端部付近に焼された痕跡が見受けられる。また、遺物番号102においては、内面中央部に施記号「×」が施されている。

盃 (図面四、119~124)

遺物番号124は、口縁部から頸部にかけての破片であるが、内面調整はナデ成形、外面は頸部にタタキの痕跡が認められ、口縁部までの間はタタキ成形のあとナデにより調整されている。

双耳壺 (図面四、126)

耳の部分が一部検出されたにとどまる。

甕 (図面五、127)

甕は、外面調整平行線文タタキであり、内面は同心円文タタキを施す。

赤彩土器

皿 (図面二、202)

皿は、高台が付いており、内外面ともに若干の赤彩を施した痕跡が認められる。

鉄鉢 (図面二、203)

鉄鉢は、整穴住居址S I 1の竈内部及びその周辺から出土した。これは、内外面共にベンガラにより赤彩を施している。

## その他

筒形上製品 (図面五、401)

筒形上製品は、整穴住居址S I 1の竈内部から出土したもので、転用されたものとみられる。接合関係は、接合個体間の直接的な接合関係はないが、内外面の調整技法などが一致する為、同一個体と推定した。類例としては、陶邑・伏尾遺跡において出土した「筒形上製品」に類似する（脚大阪府埋蔵文化財協会（1990）『陶邑・伏尾遺跡（A地区）』、第5図参照）。性格などに関しては、異口径土管E 1に該当するものと考えられる（常滑市民俗資料館（1994）『特別展 土管の歴史展～飛鳥から現代まで～』を参照）。県内では、小杉流通町地遺跡No.16で別タイプの土管が出土している。なお、実測図は推定復元案である。

土鍤 (図面五、402~404)

土鍤は、破片も含めて3点出土した。

錢貨 (図版十二、301、302)

錢貨は、何れも現代の基礎整備事業時に設置された水路の掘方から出土する。種類としては、「天聖元寶」の模鋳錢である「一大型」と呼ばれるもの（301）、並びに「皇宋通寶」（南宋、初鑄1039年）である（302）。

## 第4章 放射性炭素年代測定について

本調査では、放射性炭素年代測定を実施した。分析試料は、堅穴住居址S I 1にみられる造り付け竈内部の土壌から得られた炭化物1点である。堆積状況は、竈内部より一括出土した長胴壺群の下部に位置し、少なくとも廃棄時点以前に由来するプライマリーなものと考えられる。残念ながら、出土土器資料においては炭化物の付着が認められなかった為、土器資料に直接関連を持たせる試料は供されなかつた。

次に、サンプリングについて述べる。作業は、調査担当者が実施した。方法は、ステンレス製ビンセットを用い土壌から炭化物を抽出し、アルミホイル上で余分な土壌及び現生植物の根などコンタミネーションとなりうる要因を現地で可能な限り除去した。その後、アルミホイルに包みシリカゲルと共に、フィルムケースに収納した。サンプルは、当日中に業者まで搬入した。

分析業務は、㈱中部日本鉱業研究所に委託し、分析は核燃料サイクル機構 東濃地科学センターが実施した。年代測定は、試料の前処理、調製の後、加速器質量分析法(AMS法)によりデータが得られた(詳細は、次頁以降の報告書参照)。分析結果は、半減期を5568年として計算された放射性炭素年代が、 $1200 \pm 40$ BPである。その後、University of Washington, Quaternary Isotope Laboratory(ワシントン大学第四紀同位体研究所)において、「INTCAL 98」(International Calibration 1998)を標準曲線として開発された、「RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM 1999 Rev. 4.1.2」(放射性炭素較正プログラム)を使用して曆年代較正がなされた。年代較正は、㈱中部日本鉱業研究所が実施した。その結果、算出された年代値は、西暦815年であった。

最後に、考古学的所見について述べる。今回の調査では、出土資料自体からは分析に供される試料が検出されず、試料数も限られた条件におかれているので、分析結果の精度に限界がある。しかし、竈内部から得られた上器群に与えられる相対年代が、8世紀中頃から8世紀後半に比定できる。よって、概ね分析結果との整合性は得られたと考えられる。しかし、杯蓋や長胴壺などに関しては先後関係を有する複数の形式が出土している。このような問題などについては、今回の分析結果も踏まえた上で、胎土分析など多角的な考察を経て、土器資料の位置づけを再考する必要性も考えられる。参考までに年表を付した(第1表)。また、今回の分析では他遺跡の2サンプルを分析に供し当遺跡での参考としている。

事 項	この頃、『和名類聚抄』著される											
	放射性年代曆年代較正值(推奨値)											
西	7	7	7	7	7	7	7	7	7	8	8	9
1	4	4	4	4	5	5	6	8	9	1	7	3
0	0	1	3	6	7	1	2	9	4	5	9	7
半 城 京 に 遷 都 さ れ る	大 伴 家 守 越 口 田 を 上 る	磯 波 郡 井 名 蛭 村 鹽 田 地 図 なる	東 大 寺 大 仏 開 眼 供 養	平 安 京 に 遷 都 さ れ る								
國 分 寺 ・ 國 分 尼 寺 建 立 の 訓	大 人 木 建 立 の 詔	國 分 寺 永 年 私 財 法	鹽 田 の 増 大	家 持 ・ 東 大 寺 鹽 田 の 占 定 に 専 力 す	磯 波 郡 石 栗 村 官 施 入 出 地 図 なる							

第1表 戸出古戸出遺跡関係年表

平成 12 年 1 月 31 日  
核燃料サイクル開発機構  
東濃地科学センター

## 放射性炭素年代測定結果報告書

放射性炭素年代測定のご依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

### 分析方法

#### 1. 洗浄前処理

木炭、木片には後生の植物のひげ根などが混入していることがあるのでこれらを取り除いた。更に数ミリの小片に砕き蒸留水に浸して超音波洗浄を行い、付着している粘土や土壤を取り除いた。目に見える二次的混入物を除いた後、水酸化ナトリウム溶液(1.2 N)で二次有機物を、さらに塩酸で炭酸塩物質を溶解除去した。

#### 2. グラファイト化

洗浄した試料を真空中で酸化銅を用いて燃焼させ、二酸化炭素を回収した。得られた炭酸ガスを鉄触媒水素還元法により炭素粉末化した (Kitagawa et al. 1993) \*。

#### 3. 炭素同位体比測定

回収された二酸化炭素の一部を用いて炭素安定同位体比測定を行った。測定にはガス質量分析計（精度： $\pm 0.2\%$ ）を用いた。

#### 4. 放射性炭素濃度測定

炭素粉末化した試料を用いて、放射性炭素濃度の測定を行った。測定にはタンデム型加速器質量分析計を用い、同時にバックグラウンド試料及び国際標準試料を測定した。

#### 5. 年代算定

測定された炭素同位体比、放射性炭素濃度から放射性炭素年代を算定した。この時、バックグラウンド試料の測定値からバックグラウンド補正を行い、炭素同位体比測定値から同位体分別の補正を行った。また同時に測定した国際標準試料の測定値が標準値と一致している事を確認した。

\* H. Kitagawa, T. Masazawa, T. Nakamura and E. Matsumoto, Radiocarbon 35, p295.

## 報告内容の説明

### Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$

タンデム型加速器により測定された試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比。

### Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$

Average  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  から Background 試料の Average  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  を引いたもの。

### Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$

Ratio(R-Back)  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  に当該試料の炭素同位体比を用いて同位体分別の補正を行ったもの。

### pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$

放射性炭素濃度。Ratio(Delta  $^{13}\text{C}$ )  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  を現代炭素濃度に換算した値(1950 年を放射性炭素濃度 100% とする)。

### Libby Age $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$

放射性炭素年代 (BP)。pMC  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  から半減期 5568 年を用いて計算した年代 (Libby Age とは西暦 1950 を起點として  $^{14}\text{C}$  の崩壊から求められる年代。曆年代に換算するには別途補正が必要\*)。

\* Stuiver, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40:1041-1083.

### $\delta^{13}\text{C}$

測定した炭素同位体比。

### Background, IAEA C2, Standard

測定に用いたバックグラウンド試料及び標準試料の測定値。

### $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ , $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ について

タンデム型加速器で炭素同位体を測定した場合、 $^{12}\text{C}$ ,  $^{13}\text{C}$ ,  $^{14}\text{C}$  の値が得られるため、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比,  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を求める事が可能です。 $^{12}\text{C}$  と  $^{13}\text{C}$  では  $^{13}\text{C}$  の方が  $^{14}\text{C}$  に近い質量のためビーム安定性がよく、また補正による誤差の影響も少ないため  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を最終的な値として推奨します。

### 試料 ID

試料固有の番号。前処理、測定等についての不明な点がございましたらこの ID をご連絡ください。

平成12年「月日」

施設Gr.リーダー	チームリーダー	係員

## 放射性炭素年代測定結果報告

株式会社 中部日本鉱業研究所 様

試料名: No.1	試料ID: 1477	
Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$	Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$	$\delta \text{ "C (permil)}$
$7.6149 \pm 0.0358 \times 10^{-11}$	$7.2716 \pm 0.0342 \times 10^{-11}$	-26.4
Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$	Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$	
$7.5938 \pm 0.0358 \times 10^{-11}$	$7.2521 \pm 0.0342 \times 10^{-11}$	
Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$	Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$	
$7.6157 \pm 0.0368 \times 10^{-11}$	$7.2626 \pm 0.0345 \times 10^{-11}$	
pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$	pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$	
85.99 ± 0.48	86.11 ± 0.44	
Libby Age $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$	Libby Age $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$	
1212 ± 44 BP	1200 ± 40 BP	●推奨値

## 品質保証について

各試料測定時にはIAEA国際標準試料を同時に測定しています。この測定値が標準値と誤差の範囲で一致する事をもって測定データの品質を保証します。

標準試料	標準値 (pMC)	測定値 (pMC)
IAEA C1	0.0 ± 0.02	0.20 ± 0.01
IAEA C2	41.14 ± 0.03	41.26 ± 0.16
NIST OX-II	134.07	134.07 ± 0.26

試料名: バックグラウンド試料	試料ID: 1406
Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $2.1525 \pm 0.0836 \times 10^{-11}$	Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $2.0076 \pm 0.0780 \times 10^{-11}$ $\delta^{13}\text{C} (\text{permil})$ 2.42
Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $2.1525 \pm 0.0836 \times 10^{-11}$	Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $2.0076 \pm 0.0780 \times 10^{-11}$
Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $2.0363 \pm 0.0791 \times 10^{-11}$	Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $1.9527 \pm 0.0758 \times 10^{-11}$
pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $0.20 \pm 0.01$	pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $0.20 \pm 0.01$
試料名: IAEA C2	試料ID: 1523
Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $4.3910 \pm 0.0151 \times 10^{-11}$	Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $4.1538 \pm 0.0143 \times 10^{-11}$ $\delta^{13}\text{C} (\text{permil})$ -8.25
Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $4.3695 \pm 0.0151 \times 10^{-11}$	Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $4.1337 \pm 0.0143 \times 10^{-11}$
Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $4.2231 \pm 0.0148 \times 10^{-11}$	Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $4.0639 \pm 0.0141 \times 10^{-11}$
pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $41.14 \pm 0.17$	pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $41.26 \pm 0.16$
試料名: NIST OX-II	試料ID: 1401
Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $1.3986 \pm 0.0026 \times 10^{-11}$	Average $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $1.3323 \pm 0.0025 \times 10^{-11}$ $\delta^{13}\text{C} (\text{permil})$ -17.8
Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $1.3965 \pm 0.0026 \times 10^{-11}$	Ratio(R-Back) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $1.3303 \pm 0.0025 \times 10^{-11}$
Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $1.3761 \pm 0.0029 \times 10^{-11}$	Ratio(Delta $^{13}\text{C}$ ) $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $1.3206 \pm 0.0026 \times 10^{-11}$
pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $134.07 \pm 0.29$	pMC $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ $134.07 \pm 0.26$

sample ID: 1477

Radiocarbon Age BP	1200 +/- 40	Reference
Calibrated age(s) cal AD	782, 790, 815 842, 859	(Stuiver et al., 1998a)
cal BP	1168, 1160, 1135 1108, 1091	
cal AD/BC (cal BP) age ranges obtained from intercepts (Method A):		
one Sigma**	cal AD 776 - 890 (1174 - 1060)	
two Sigma**	cal AD 691 - 701 (1259 - 1249) 712 - 750 (1238 - 1200) 762 - 900 (1188 - 1050) 919 - 960 (1031 - 990)	

Summary of above:

maximum of cal age ranges (cal ages) minimum of cal age ranges:

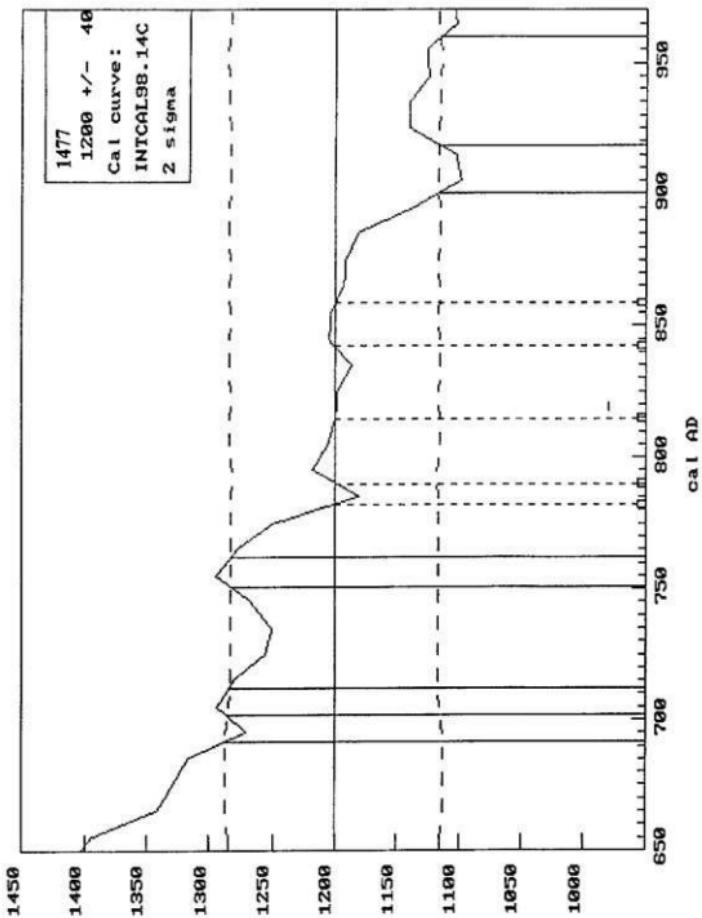
1 sigma cal AD 776 (782, 790, 815, 842, 859) 890  
cal BP 1174 (1168, 1160, 1135, 1108, 1091) 1060

2 sigma cal AD 691 (782, 790, 815, 842, 859) 960  
cal BP 1259 (1168, 1160, 1135, 1108, 1091) 990

cal AD/BC & cal BP age ranges (cal ages as above)

from probability distribution (Method B):

% area enclosed	cal AD (cal BP) age ranges	relative area under probability distribution
68.3 (1 sigma)	cal AD 784 - 879 (1166 - 1071)	1.000
95.4 (2 sigma)	cal AD 694 - 696 (1256 - 1254) 715 - 749 (1235 - 1201) 764 - 899 (1186 - 1051) 920 - 956 (1030 - 994)	.013 .077 .833 .077



## 〔結果報告〕

- ・試料名No.1 (平成11年12月27日採取) - Sample ID: 1477
- 切片法による年代交点 AD 782,790,815,842,859
- 確率分配法による年代 AD 784-879 (確率100%)
- (推奨年代値 AD 815)
- 添付 校正グラフ参照

## 第5章 結 語

### 器種構成について

本発掘調査で出土した遺物からは、第2表に提示した数値を得ることができた。なお、算出方法としては接合作業を実施した上で、個体と認識できたものを『個体数』とした。この他にも、口縁部で算出する方法などもあるが、接合状況が比較的良好であったためこの方法を採用した。以下は、表の記述をもとに若干の考察を加える。全件の器種構成比率をみると、食膳具が55.8%と多数を占める。次いで、煮炊具、貯蔵具の順となり、全体としては食膳具を多数必要とする性格を有した集団の存在を推察できる。また、煮炊具・貯蔵具の比率が拮抗する点に関しては集落的傾向を示すものと考えられる。この点について、他の遺跡との比較をする。高岡市五十里所在の須出藤ノ木遺跡では、食膳具が62.2%、煮炊具が28.0%、貯蔵具が9.8%という数値が提示され、当遺跡と類似した傾向を示している。また、越中国府所在地とされる越中国府関連遺跡（高岡市伏木）においては、食膳具が90.5%、煮炊具が3.6%、貯蔵具が5.9%という数値をみると。さらには、莊園の荘所とされるじょうべのま遺跡（入善町）においては、食膳具が85.1%、煮炊具が9.7%、貯蔵具が1.9%（9世紀）の数値が提示され、その後の傾向は食膳具が94.9%、煮炊具が0.7%、貯蔵具が4.4%（10世紀）とされる。一方、周辺に東大寺領莊園を控える集落である浦田遺跡（立山町）の動向は、食膳具が54.0%、煮炊具が43.6%、貯蔵具が2.3%となり、越中国府関連遺跡及びじょうべのま遺跡とは違った傾向を示し、食膳具の比率が減少し、その他器種の割合が増加する傾向にあり、当遺跡と類似している。

器種構成比率については、官衙的性格をおびる遺跡では食膳具が半倒数を占めるのに対し、集落遺跡では食膳具と煮炊具の差が大きく変わらない傾向にある。また、官衙的な遺跡では灰釉陶器や絵釉陶器といった所謂『高級陶磁器』が出土するのに対し、集落ではこれらは殆どみられないという現象が指摘されている点をふまえると、当遺跡においては当該器種の破片は無かった。このような傾向から、浦田遺跡などに類似すると考えられ、集落的性格を帯びるものと考えられる。特に、金田幸裕氏により当遺跡の北側にあたる高岡市戸出市野瀬周辺に東大寺領莊園である「伴名蛭村」を比定する案が提示されており、『東大寺領莊園絵図』の南側に位置した集団を想定できる。さらに、東方には同じく東大寺領である「石渠村」が比定されており（高岡市中田）、何れにせよ、浦田遺跡と同様に莊園のボーダーに展開した集団と捉えることができる。しかし、赤彩上器（鉢類）や筒形土製品といった遺物が堅穴住居から出土するなど、単純に一般的な集落としてのみとらえることは困難なものがある。今後、事例の増加などを待って再考の余地はある。

食膳具	煮炊具	貯蔵具
須恵器杯類 50個体 79.3%	土師器皿 17個体 65.4%	須恵器甕 15個体 62.5%
土師器皿 1個体 1.6%	土師器鉢 2個体 7.7%	須恵器甕 9個体 37.5%
赤彩土器 2個体 3.2%	土師器小甕 5個体 19.2%	
土師器杯類 10個体 15.9%	土師器瓶 2個体 7.7%	
小計 63個体 55.8%	小計 26個体 23.0%	小計 24個体 21.2%
合計 113個体	100% (筒形土製品は除く)	

第2表 戸出古戸出遺跡の器種構成

### 検出遺構について

検出遺構の年代観は、堅穴住居址 S I 1 から出土した共伴遺物群などにより、8世紀中頃以降に展開することが考えられる。次いで、掘立柱建物址が一部同時共存する可能性をふくみながら、連続的に建てられる時期が想定される。建て替えの回数は、少なくとも3時期が考えられ、堅穴住居址 S I 1 を単独で先行させたケースでは4時期考えられる。

遺物の組み合わせは、掘立柱建物址 S B 1・4・5・6 が共存関係にあり、場址 S A 3・4 が付属すると考えられる。また、掘立柱建物址 S B 2・7 が権址 S A 1 を伴う配置であるとみられる。掘立柱建物址 S B 3 については、今回の調査区では対応する建物が想定できなかったが、軸角が他の建物群などと異なる為、ひとつの時期設定をした。また、権址 S A 2 が対応関係にあると考えられる。

遺構自体の年代観は、掘立柱建物の建て替え回数を基準に検討してみる。木造建物の寿命は、概ね20～30年間と考えると、3時期想定する場合は60～90年程度の存続期間が導き出され、4時期では80～120年間存続したことになる。つまり、前者では8世紀中頃にはじまり9世紀初頭から9世紀前半まで、後者では同時期にはじまり9世紀前半から9世紀後半まで存続したことになる。また、年代測定結果（西暦815年）を堅穴住居の廃絶時期ととらえると、3時期の場合で9世紀後半から10世紀初頭の間まで存続し、4時期の場合は9世紀末から10世紀前半までの存続を考えられる。しかし、今後隣接地の調査などが実施された時点で更に検討の余地あろう。

### まとめ

当遺跡の存続期間は、8世紀中頃から9世紀初頭を中心としたものである。遺跡の性格としては、器種構成から莊園の周辺に展開した扇状地上の開墾集落であることが推定できた。また、出土遺物においても灰釉陶器など所謂「高級陶器」などの出上がみられないことから、一般的な集落の存在を窺わせる。さらには、出土遺構にても堅穴住居址 S I 1 が存在したことからも、在地集落としての様相を呈し、律令制下における「郷」の一部であることが考えられる。周辺に比定されている勘波郡内の郷は、平安時代の書物である『和名類聚抄』に記述される12郷のうち、「大岡郷」・「三野郷」・「意斐郷」などが挙げられている。特に、「大岡郷」に関しては江戸時代の篠農家「五十嵐萬好」（高岡市東五位の住民）らが「大岡御所」に比定する考えを提示しており、これに該当する可能性も少なからずあろう。

次に、この集落は祖父川筋を通じて中保B遺跡（高岡市中保）及び高道向島遺跡（砺波市高道）の中間地点に立地しており、内陸交通の拠点のひとつが近辺に存在した可能性がある。

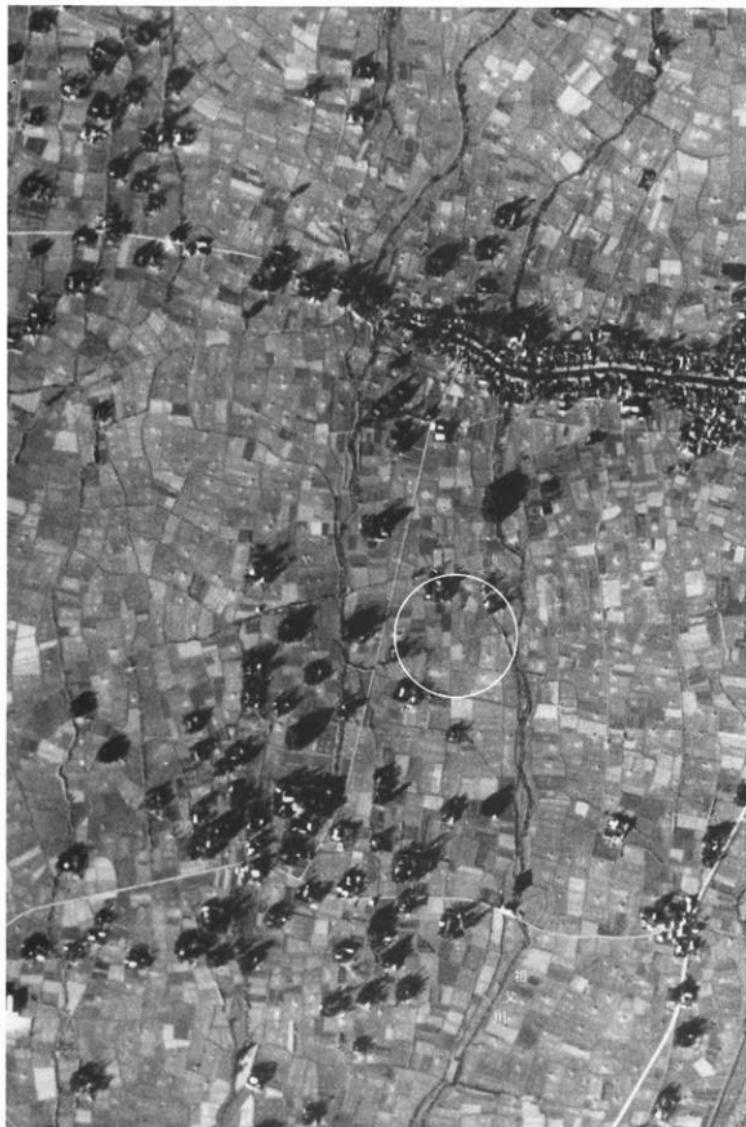
特徴的な遺物としては、土師器のうちに「鉄鉢」と呼ばれるものがある。これは、通常は須恵器であるが、赤彩を施すなど日常器としての使用は想定にくく、米壁や用途について示唆的な存在である。なお、高岡市内においては中保B遺跡（土師器）及び麻生谷遺跡（須恵器）に事例が知られるにとどまるが、両者ともに断片的に出土するにとどまる。出土した遺構は、堅穴住居址 S I 1 にみられる竈内部及びその周辺である。米壁に関しては、恐らくこの集落が直接入手したものではなく、集落内の成員が周辺の莊園など（例えば、東大寺領庄園）に労働力を提供し、その過程において入手したものと考えられる。当遺跡近傍に比定案が提示されている庄園としては、北側に「作名蛭村」（高岡市）・「山市野瀬」並びに現庄川を挟んで「石葉村」（高岡市中田）などがある。何れも、東大寺領であり、積極的に解釈するならば寺領を管理する集団から入手したものと考えられる。

何れにせよ、「筒形土製品」のような用途不明品なども存在することから、今後戸山地区における調査事例の蓄積を待って再考する必要はある。

図 版 • 図 面

圖版一 航空写真（米軍撮影）

呉市舊地



米軍撮影 (M644-107) 1947年11月13日撮影

S = 1/8,000

図版二  
調査区風景



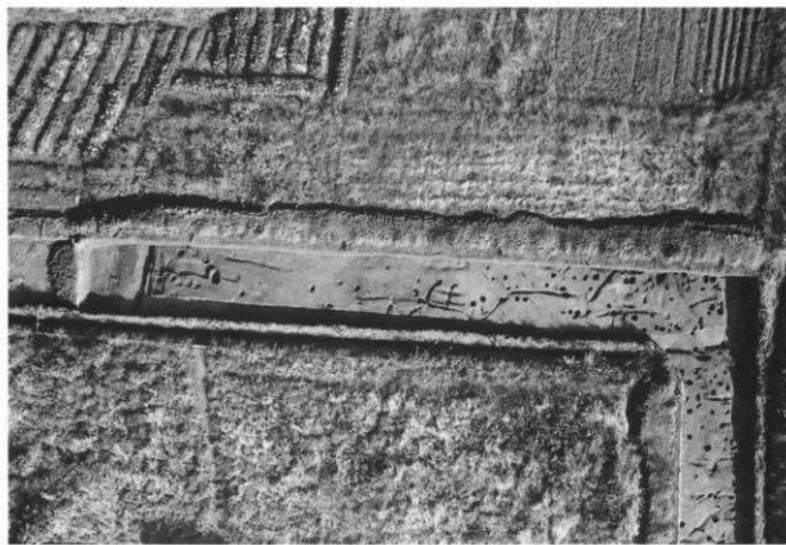
調査前近景（北から）



重機掘削



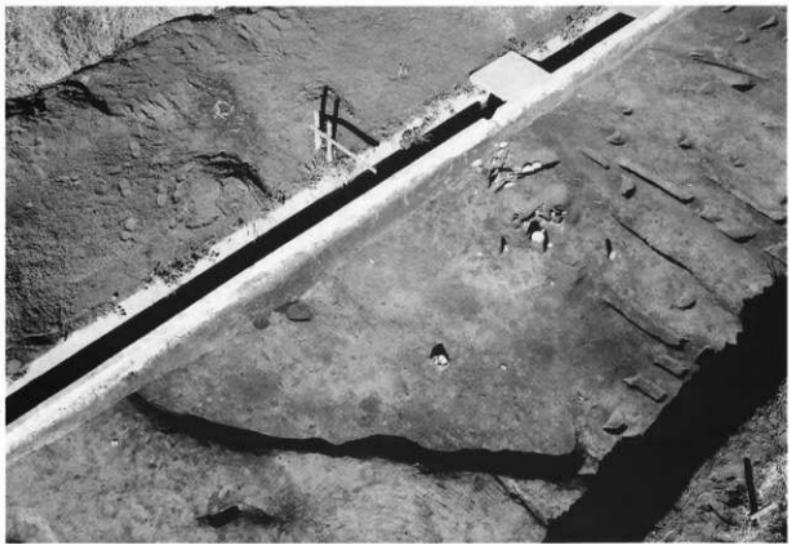
調査区（中央部）



調査区（北部）



整穴住居址（S11） 調查風景



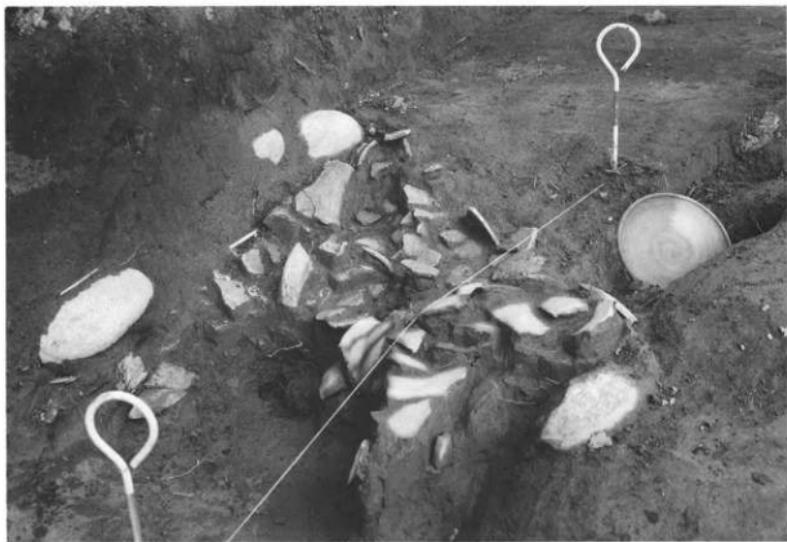
整穴住居址（S11） 遺物検出状況 全景



整穴住居址（S 11） 遺物検出状況 窟内部 近景



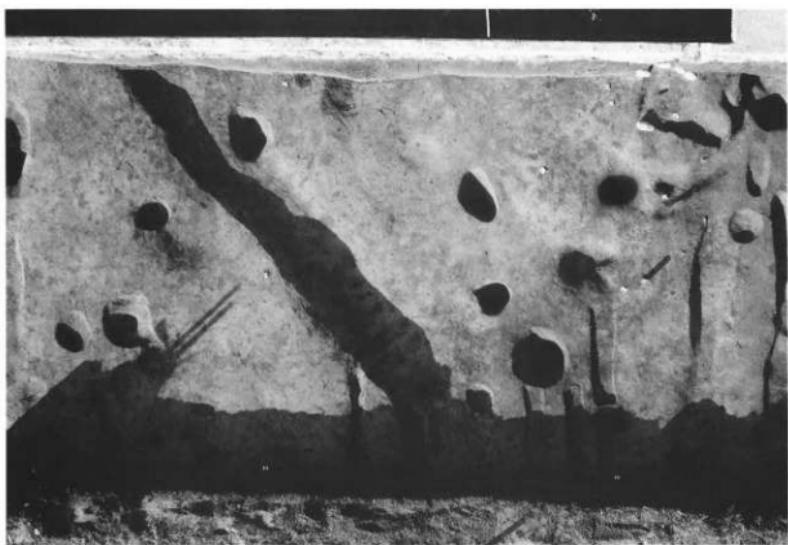
整穴住居址（S 11） 遺物検出状況 窟測込 近景



堅穴住居址（SII） 遺物検出状況 瓦及び煙出し周辺 近景



堅穴住居址（SII） 完解状況及び土層断面 全景



整穴住居址 (S II) 完掘状况 垂直全景



整穴住居址 (S II) 完掘状况 窝周边 近景

図版八 航空写真



航空写真（西から）



航空写真（南西から）



101



103



102



104



102



105



107



106



109



108



111



112



113



114



115



116



117



118



204



119



201



202



205



206



207



207



209



210



212



214



401



213



215



301



302



101



103



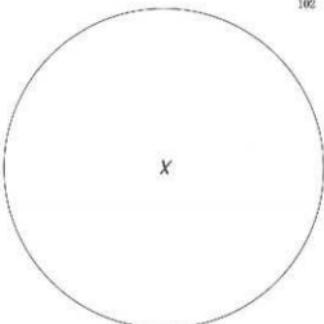
104



102



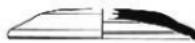
105



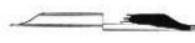
X



106



107



108



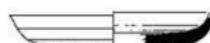
109



110



111



112



113



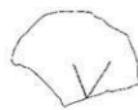
114



115



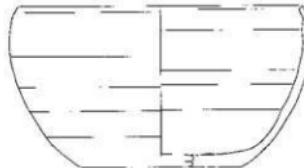
116



117



118



203



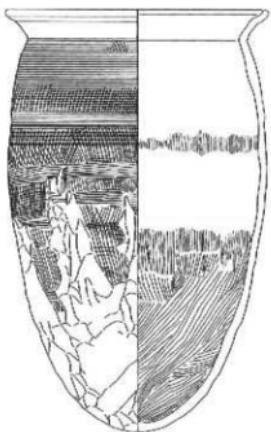
201



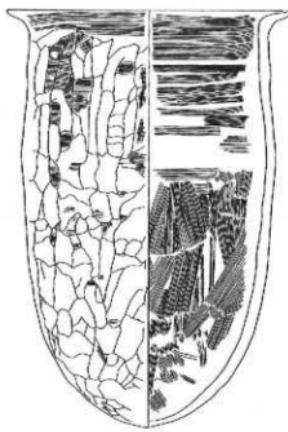
202



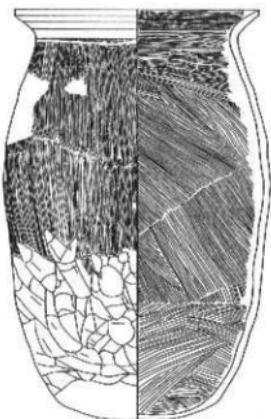
204



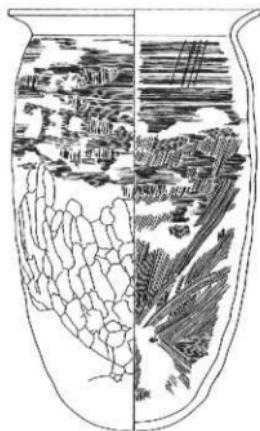
205



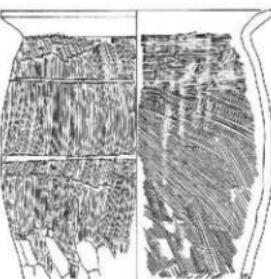
206



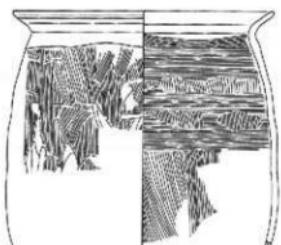
207



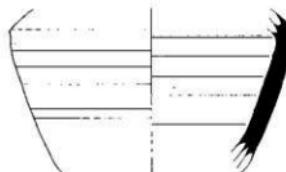
208



209



210



119



120



121



122



123



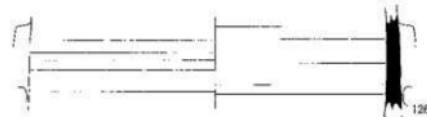
124



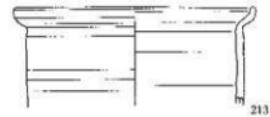
125



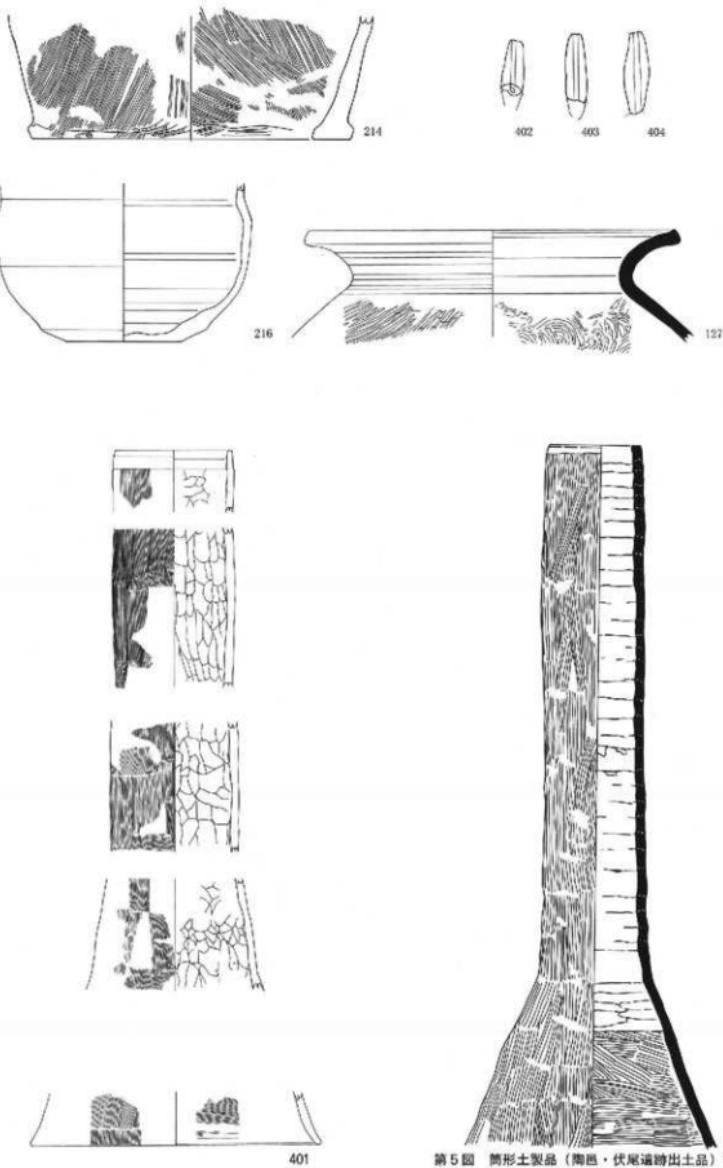
126



127



128



第5図 簡形土製品（陶器・伏尾遺跡出土品）1/6

報告書抄録

ふりがな	といでるといせきちょうさぬい							
書名	戸出古戸出遺跡調査概報							
副書名	平成11年度公営土地改良総合整備事業（高岡地区足戸28号線）にかかる農道拡幅改良工事に伴う発掘調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第46回							
編著者名	太田 浩司							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号 TEL0766-20-1463							
発行年月日	西暦 2000年3月31日							
所収遺跡	所在地	コ一ド		北緯 °'."	東經 °'."	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
戸出古戸出遺跡	富山県高岡市 戸出地内	01602	202228	36° 40' 32"	136° 58' 32"	19990802 19991213	920m <sup>2</sup>	農道拡幅改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
戸出古戸出遺跡	集落跡	奈良時代～ 平安時代	掘立柱建物址 堅穴住居址 川跡	土師器（鉢・杯・壺・瓶・皿）、須恵器（杯・壺・壺）、土製品（筒形土製品、土錐）				

---

高岡市埋蔵文化財調査概報第46号  
戸出古戸川遺跡調査概報

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2000年3月31日

印刷所 キクラ印刷株式会社

高岡市高岡市鍛治48-2

---